若越郷土研究
34の4

蓮如信仰の一考察（一）

阿部法夫

一、はじめに

浄土真宗を開いた親鸞（一一七三～一二六二）の没後、約二〇〇年であらわれた蓮如（一四一五～一四九九）は、当時参詣する人とて少なく、閑古鳥が啼いていた本願寺を急速に膨張させ、今日のような日本最大の宗教組織に変貌させた。

彼一代で大事業をなしとげ、一零細教団にすぎなかった本願寺真宗教団を雄大なスケールにまで拡大させた蓮如の生涯は、天才的な組織者、類いまれなる政治家、あるいは企業家、大実業家としての活動の連続であったといえる。

それまで真宗で勢力を張っていたのは、高田派・仏光寺派などである。それらを駆逐し、現在にいたるまで揺るぎない本願寺の大繁栄の基礎づくりも蓮如は推進していた。

蓮如の業績は吉崎時代にそのすべてが集約されるといってよいだろう。吉崎におけるわずか四年という短期間に、新しい真宗教団発展の布石となる教義の大衆化、布教の新方式、勤式の簡略化などを精力的に行っているからである。

そうした蓮如の布教活動の積極性は、吉崎に熱狂的な門徒を群集させている。後世、一向一揆という凄まじいエネルギーを生みだしてもいる。そのエネルギーの一端は、加賀において約一世紀にわたる真宗門徒自治国、いわゆる「百姓ノ持チタル国」を出現させているほどである。[1]

近世・近代を通じて布教者より「真宗の現在の繁昌は、ひとえに〝真宗中興の祖〟蓮如上人ご一生のご苦労のお陰である。」と事あるごとに説教される。

また、御文（おふみ）（または御文章（ごぶんしょう）ともいう。本稿では、御文〈章〉とあらわす。）の朗読も説教や法座の後におごそかになされる。

御文（章）とは、蓮如の時代に大いに流行していた仮名法語形式による手紙である。個人宛というより講という集団への手紙を、吉崎時代精力的に書き与えている。後世大量に版本として印刷され、今だに門徒の仏壇内に大切に収められている。そして、法事の時などに必ず拝読される。

このようにして、目（視覚）からも耳（聴覚）からも真宗の教説（蓮如の教説といいかえてもよい）が門徒の心に響いてくるのである。いわば、マスコミュニケーションによる布教伝道であり、宗教ニューメディア作戦といえる。

このくりかえしの効果は大変なものであろう。蓮如に対する特別な宗教的感動が生まれ、蓮如への親近感・愛着心が育っても不思議ではなかろう。

いわゆる『妙好人伝』に載せられた篤信の信者たちも、御文（章）の教えを心のささえとして、説教のくりかえしの中から育てられたものと思われる。

このような状況で、布教者＝僧と門徒＝俗との間に蓮如への信仰が培われ続けたものだ

ろう。

蓮如の組織力・政治力あるいは経済力を見て、さまざまな人間的魅力をひきだす人は多いだろうが、蓮如を別の面からとらえ直してみるのもおもしろいのではないだろうか。

本稿においては、「レンニョサン」という年中行事を通して、また、蓮如伝記・蓮如伝説から見た蓮如信仰にスポットをあてて描いていこう。

江戸時代中期の経世家太宰春台は、その著書『聖学門答』巻下において、

一向ノ門徒ハ、弥陀一仏ヲ信ズルコト専ニシテ、他ノ仏神ヲ信ゼズ。如何ナル事アリテモ、祈禱ナドスルコト無ク、病苦アリテモ呪術・符水ヲ用ヒズ。愚ナル小民・婦女・奴婢ノ類マデ、皆然ナリ。是親鸞氏ノ教ノ力ナリ。(2)

と一向宗すなわち真宗の一仏崇拝・一仏信仰に驚嘆している。「門徒もの知らず」という諺はここから出ているようである。太宰春台が見たように、真宗の門徒は民俗信仰的なものを信ぜず、また知ろうともせず、純粋に真宗信仰の世界に生きているといわれている。

だが、真宗の門徒にしても日本民俗学の創始者である柳田国男流にいえば「常民」の一人である。常民とは、文字通り通常の民衆、大多数の民衆と解せる。日本人個有の民俗習慣などは、真宗の弥陀イッポン宗旨の影に隠れながらも見てくるはずである。

また、民俗資料の採訪は真宗信仰の厚い地域では困難であるとされてきたが、日本古来の民俗信仰がほとんどそのまま、あるいは形を変えながらも真宗習俗の中に生き続けていると思われる。すなわち、真宗信仰の中にも民俗信仰的要素は多分に見つけることができるわけである。さらにいえば、真宗独自の民俗信仰があってもよいと考える。

真宗独自の習俗といわれる「報恩講」にしても、その他の年中行事にしても、子細にながめてみると民俗宗教・民俗行事と深い関わりを認めることができるとする研究が発表されている。(3)

そうした点を考慮にいれながら、論を進めてみよう。それでは、蓮如とその当時の門徒の動向、特に信仰意識面に注意を向けてみよう。

二、蓮如は〝生き仏〟だった

本願寺教団は蓮如の書いた「御文(章)」を常に拝読し、蓮如の定めた「正信偈和讃」の勤行を今日にいたるまで続けている。そのため、親鸞の教団というよりは、〝蓮如教団〟という性格をもつことは否めない事実といえよう。(4)

蓮如というフィルターを通してしか真宗を語り、また、親鸞を考えることができなかった時期が長かったのである。

蓮如に対する思い入れ、蓮如の偉業に対する感謝、宗祖親鸞の名代として敬めること、などなど、これらの信仰的感情が真宗信仰の世界に没入させることに結びつくのではないだろうか。このような意味で、蓮如に対する信仰は真宗信仰の要であるといえる。真宗信仰の紐帯といえまいか。

真宗の教えは、「ひとえに弥陀をタノミ念仏して極楽往生を願う」ということになろうか。「ひとえにタノム」とは絶対他力の世界である。弥陀一仏のお救いにあずかるのだという人間のハカライなど一つもない世界である。この単純といえば単純な教えを越前の地に広

めたのはやはり蓮如であろう。

越前における真宗の教線は、蓮如以前から如導・信性などによって開拓されており、三河糸の念仏教団によって占められていた。蓮如はそれらを吸収合併してしまい、越前ひいては北陸の地を本願寺系で塗りつぶしてしまったのである。

蓮如が越前国細呂宜郷吉崎に御坊を構えたのは文明三年（一四七一）のことである。長禄元年（一四五七）に本願寺第八代法王（正式には留守職）に気の遠くなるような長い雌伏の末就任すると、蓮如は部屋住み期間に充電した宗学をはきだすように、一気に精力的活動を始めた。またたく間に近畿地方を中心に門徒を広く獲得したいった。それまで、

御本寺様ハ人セキタヘテ、参詣ノ人一人モミエサセタマハス。サヒ〳〵トスミテオハシマス。[5]

とまでいわれた本願寺を再建することが、生き別れになった生母より課せられた使命であったと伝える。彼女は、蓮如の父存如の召使いをしていた女性であったようだ。その生母が今生の別れの記念として書かせたという「鹿の子の御影」は今でも超勝寺に伝わる。その縁で当寺において「蓮如忌」が行われているという。[6]

蓮如の積極的な布教によって本願寺の門徒は次第に増加していく。これを不満に思った叡山衆徒は、蓮如が無碍光流の邪義を広めているとして、寛正六年（一四六五）本願寺を急襲し坊舎を破却した。

あやうく本願寺を逃れた蓮如は、河内・近江の各地を転々としていたが、文明三年吉崎に来住し、北陸ひいては全国への布教の基盤づくりを推し進めた。蓮如は吉崎において次々に布教の新機軸を打ち出していった。

まず、御文（章）というレター作戦で伝道布教に力を注いだ。御文（章）とは、当時の一文不知の庶民にも分かりやすく簡潔に浄土真宗の教え＝宗祖親鸞の教えを説いたものである。吉崎時代まではわずかに数通しか出していないが、吉崎時代以後は飛躍的に増加させ、約八〇通の多きに達しているという。[7]門徒教化の最大の手段として重要な役割を担ったことであろう。

また、蓮如は延暦寺の一末寺として勤めていた「六時礼讃」を取りやめて、本願寺が延暦寺より独立した宗門であると宣言するかのように、仏前のお勤めに「正信偈・和讃」を採用することになった。

六時礼讃とは、昼夜六回（早朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜の六時）仏徳を讃嘆するために「往生礼讃偈」を修する行法である。[8]

正信偈は、親鸞の主著『教行信証』の行巻末に著わされた六〇行一二〇句からなる偈文で、漢文で書かれた真宗の正意と教義相伝の歴史を顕したものである。

和讃も親鸞によって著された。仮名交り文で書かれた真宗信仰の讃歌である。

正信偈・和讃を詠い上げることにより、たとえ字が読めなくても、無学であっても、ともに念仏の喜びを分かちあえたことだろう。

より効果的に伝達普及させるために、正信偈・和讃を開板刊行した。文明五年（一四七三）のことである。真宗聖典刊行の嚆矢であった。

さらに、蓮如は名号も大量に書き与えている。存如時代まで授与していた紺地金泥の無碍光本尊をやめ、白紙に墨書した九字（南無

不可思議光如来）・十字（帰命尽十方無碍光如来）・六字（南無阿弥陀仏）の名号本尊を多く書いている。[9] 特に六字名号が最も多かった。現在県内に多くの蓮如真筆と伝える六字名号が残っているのはこうした理由による。

このような布教によって、吉崎には北陸をはじめ東海・関東・奥羽などの遠国から多数の人々が群集するようになった。門前の大通りをはさんで「多屋」という宿坊がずらりと並ぶことになる。[10] この吉崎時代以降、本願寺教団は発展期を迎えることになる。

当時吉崎においては、

加州能登越中両三国ノアヒタヨリ道俗男女群ヲナシテ、コノ吉崎ノ山中ニ参詣[11]

しており、

此山中ニ経廻ノ、道俗男女ソノ数幾千万トイフ事ナシ[12]

という活況を呈していた。この状況を蓮如は次のように当惑もし、喜びもしていた。

コトニ加賀越中越後信濃出羽奥州六ケ国ヨリ、カノ門下中コノ当山ヘ道俗男女参詣ヲイタシ、群集セシムルヨシ、ソノキコエカクレナシ。コレ末代ノ不思議ナリ[13]

吉崎の御坊に群集する門信徒の中には、

在家止住ノツミフカキ身カ（中略）信心決定シテマコトニ極楽往生治定ト、ココロエタラン身ハ、ソノアリカタサノアマリ、報謝ノタメニ足手ヲハコヒ、マタ、当山ニ安置スルトコロノ本尊、ナラヒニ、開山ノ御影ヘモマイリ、マタ、ワレラナントニモ対面ヲトケン[14]

として来ている熱心な門徒の他に、

ナニノ分別モナク、タタヒトマネハカリニキタラントモカラ[15]

も参詣群集してきていた。蓮如は後者に対して、

ワガマエエキタランスルヨリハ、山野ノ墓原ヘユキテ、五輪率都婆ヲオカミタランスルハ、マコトニモテ、ソノ利益モアルヘシ[16]

と強くつきはなしている。また、

当山ヘナニノココロエモナキヒトキタリテ、予ニ対面シテ、手ヲアハセオカメルコト、モテノホカナケキオモフトコロナリ、サラニモテ、タフトキスカタモナシ[17]

（傍点筆者）

と誡めている。

長々と蓮如自身に語っていただいたが、蓮如の元に種々の人々が群集する様子が描かれている。ここで注目したいのは「何の心得もない者が来て、私と対面して手を合わせて拝む」という傍点の部分である。吉崎の御坊にひきもきらずに群集する門信徒は、ある種の宗教的感動を覚えたであろう。また、蓮如の説法に接し法悦に浸りきったであろう。

すでに故佐々木孝正氏は、そこに蓮如が群集する人々によって「生き仏」として礼拝されていたと指摘されたが、[18] 蓮如が本願寺教団内においてまさしく親鸞の血統と法脈をともに受け継いだ絶対的権威者として意識されるようになり、それが一部の門信徒の間には「生き仏＝生き神」として礼拝・信奉されていたことを示すものと考えてよいだろう。

御堂衆、信心イカニモヨクトラレテ候ラント、田舎ノ人ハイキホトケノヨウニオモフナリ、シカルニ無道心ナリ、アサマシ事ナリ。[19]

と御堂衆（本山の御堂の仏事一般を勤仕し差配する職をいう）に対して堅固な信心を獲れ

よと蓮如は誡めている。すなわち、蓮如は自分を、また自分を取り巻く僧達を「生き仏」として拝むことを否定している。そのような蓮如個人の意志とは別に、門信徒のなかには極めて原始的な人神（ヒトカミ）の観念が意識の底辺に存在しており、「生き仏」として拝んでしまうことに注意をはらう必要があろう。[20]「人神（Man—God）」の観念については、次のようにとらえることができる。

人神とは、人間が生前または死後、神と考えられ祀られる信仰である。日本における人神は、大別して二つの類型がある。一つは、人が死後人神に化した場合である。他は、人が生前より人神に化した場合である。前者は、「御霊信仰」によってしばしば神社に祀られることになる。後者は、さらに三種類に分けられる。第一類は、一時的な人神といえる存在である。第二類は、仮装神人と分類される人達をいう。さらに第三類は、生前に祀られる生祀となる人神である。そして、その背後には世俗的な権力から生じた一種の権威信仰のあることが第三類の特徴である。[21]

第三類の概念が蓮如信仰に通ずるものであると考えられる。蓮如の説教を聞くために群参する門信徒を停める御文（章）を出しているほどであるから、今でいうスターに集まるファンの姿を思い浮かべれば思いなかばにすぎるであろう。

生祀の人神に一種の権威信仰が見られるという指摘はカリスマ的人格の発露と考えてもよさそうである。

カリスマ性とは、人を引きつける強い個性、魅力を持った人、あるいは、非常な統率力を持った人をいう。蓮如の場合もこうした性格はあったと見てよいだろう。先に引用した御文（章）に見つけられる。また、後世の蓮如伝を見ても、蓮如を理想化・カリスマ化する傾向が強く出ているとする研究もある。[22]

すなわち、蓮如は生前より門信徒の信仰の対象となっていたのである。その傾向は彼の晩年・死後ますます強くなり、

御往生ノ後御堂へ入申テ、聖人ノ御前ニテ人ニモ見セヨ、ト御遺言ニ仰候キ。廿五ノ晩景ニ数万人ヲカミタテマツル。[23]

と記録されるように、遺体を生きるがごとく御堂で対面させている。また、蓮如伝の表現を借りれば、「権者の仁」・「親鸞の化身」（『蓮如上人遺徳記』）・「観音の化身」（『蓮如尊師行状記』）などとして崇拝を集めたことだろう。このようにして蓮如信仰は育っていったものと考えられる。

蓮如のカリスマ的人格は後世の歴代法王にも及ぶこととなる。世襲的カリスマという、強大な絶対的権威者として真宗門徒の上に君臨するようになる。蓮如自身がつくり成長させてきた真宗本願寺教団において、カリスマ的な法王を頂点とした教団支配と、教化層、僧侶達のくりかえしの教化・布教のもと、蓮如自身が崇敬されることになる。

このような蓮如に対する信仰は、真宗信仰における精神的中核として、また、真宗宗祖親鸞の名代（みょうだい）として、永く門信徒、庶民の心の中に生き続けてきたといえるだろう。

庶民側の蓮如信仰としてあらわれる年中行事の一つに「レンニョサン」がある。「レンニョサン」とは、蓮如御影の巡行を指すが、以下、福井県内における「レンニョサン」を描いていこう。なお、蓮如の法嗣である教如や乗如・達如についても、同様の御影巡行がそれぞれ

報告されている。[24]

「レンニョサン」とこれらの行事を比較研究することによって、真宗と民俗の関わりを地域差でとらえることができるのではないだろうか。今後の研究を待ちたい。

三、二つの「レンニョサン」

毎年、春の四月二十三日から五月二日まで吉崎両別院で執行される「蓮如忌」にあたって、京都の東本願寺から特別に下向される蓮如御影がある。京都、吉崎間約一六〇キロにも及ぶ道程を、現在でもすべて徒歩で巡行している。

この真宗大谷派の蓮如御影道中を、人々は「レンニョサン」と親しみを込めて呼び慣わしている。正式には「蓮如上人御影像御下向（あるいは御上洛）道中」と呼ばれている。

かって、テレビで二度ほど放送されたことがあった。そうした関係で、割合広く知られた春の年中宗教行事となっている。この行事の調査報告もこれまでかなり出され、その実態などは明らかにされているところである。[25]

ところが、福井県の「レンニョサン」はもう一つある。浄土真宗本願寺派にも「レンニョサン」が、今でも連綿として続いているのである。

毎年七月初めに吉崎、福井間を巡行する蓮如御影がある。七月三日から十一日までに行われる本願寺派福井別院での「蓮如上人讃仰法要」にあたって、吉崎から福井までの約四〇キロの道中を巡るものである。

本願寺派のものは、現在では御輿が車両に乗せられて走り去るように運ばれていることや、毎年ほぼ同じメンバーで巡るという運営方法がとられていて、ある程度限られた門徒によって運営されているなどの理由で、割合世に知られていないのではないだろうか。看見の限り調査報告はこれまでなされていない。

大谷派の「レンニョサン」は、去る昭和四十六年に、また、本願寺派のものは、この昭和六十三年にそれぞれ随行する機会を得たので、今回両派の「レンニョサン」を比較検討を加えることができるわけである。これにより、福井県すなわち越前における真宗の発展を蓮如信仰という視点でとらえ直すことができるのではないだろうか。この点が本稿をしたためる一つの理由となる。

それでは、大谷派の「レンニョサン」から描写していこう。すでにこの行事について多くの先輩諸氏の著書・論文が発表されているが、[26]この興味の尽きない真宗習俗を私なりに再び描いていこう。

筆者は、この年中行事ゆかりの寺に生まれたものである。幼き頃より、「蓮如上人様お通り」と呼ぶ先触れのマイクの声に心が弾んだものである。毎年、同じ日時に訪れる輿に乗せられた「蓮如さん」を、必ず一つ前の立寄地まで自転車のペダルを踏んでお迎えしたことが長く続いた。

しかし、当時は蓮如の遺体そのもの（ミイラ仏のようなもの）が運ばれてくると信じており、親しみを覚えていたものの一種独特の近寄り難さを感じていたものであった。そして、どこから来てどこへ行くのか、不思議に思っていたものだった。

蓮如の御影（いわゆる絵像である。寿像・真影ともいう。）が、京都から吉崎までを往復するのだと分かった時の喜びは、次第に全行程をどうしても知りたいという願望になっていった。長じて後、宗門の大学に入学するに

あたり、この年中行を解明することが筆者の大学に入る証（あかし）であるとまで考えるようになった。

そして、全行程の随行が叶うわけである。その当時の随行員の人々のご好意に感謝しなくてはならないだろう。参加申込みの時点の十一月では、すでに随行のメンバーは決定済みであった。出発時刻に東本願寺へ行けば何とかなるだろうということで、東本願寺の正面へ詰めかけた。そして、無理に随行してしまった。二日目以降の随行を全員一致で快諾していただき、吉崎までの道中を無事に完遂できたのである。

全過程を卒論に仕上げるという前提の随行であったので、往復路を一年で巡ってしまったのであった。普通、随行は下向・上洛のいずれか一方しか許されない。二年にわたって往復路のワンセットが成立する。また、随行メンバーは下向、上洛で完全に入れ替わるのである。

三の㈠　大谷派の「レンニョサン」

福井県の北端部、石川県との県境近く、金津町吉崎にある本願寺東別院において、毎年四月二十三日から五月二日にかけて蓮如忌が厳修される。別院前の高札には、「蓮如上人御忌法要」・「慧燈大師御忌」などと掲げられ、真宗中興の祖蓮如の遺徳を偲ぶ法要が十日間連日連夜いとなまれる。

「蓮如忌」は、一般には「レンニョサン」とか、「蓮如御忌」・「吉崎御忌」などとも呼ばれ親しまれてきた。「吉崎祭」といわれた時期もあったようだ。[27]

蓮如忌の期間中、それほど広くない吉崎東別院の境内は、一生に一度は吉崎へお詣りさせてもらわねばと集まってこられる大勢の真宗門徒で埋め尽くされる。近郷近在をはじめ、北陸各地、さらには全国各地からの善男善女で門前市をなす賑わいを呈する。境内のかたすみにある宝物館では、種々の宝物が拝観できるようになっている。

近くの民家は、臨時宿泊所に早変わりし、露店が多数軒を並べ、勤行や法座の途中でも別院前の道路は人の波でごったがえすという。[28]隣り合わせの本願寺派吉崎別院・願慶寺へも参拝・参詣の足は伸びている。

一昔前までは、参詣者が北潟湖を舟に揺られて往来したという。去る昭和六十二年四月二十九日に「吉崎舟参り」の往年の情緒が再現された。「〝北潟湖に春の風物詩〟が三十数年ぶりに復活した」という新聞記事を読まれた方もおられるだろう。

蓮如忌以外の時期には、ほとんど参詣する人もない。ただ、宝物の拝観に訪れる観光客がちらほら山門の階段を登っていくにとどまる。そんな吉崎東別院に蓮如忌の期間中どうしてたくさんの門徒が参集してくるのだろうか。

参詣のお年寄りにお話を伺うと、「蓮如さんにお会いできるから」とか、「今年もまた蓮如さまとお話ができるから」などと、お念仏の声とともに答えてくださった。これは、別院本堂の内陣に御忌の間だけ開帳される蓮如上人御影に対面できる喜びをあらわしている。

この御影は、文明七年（一四七五）吉崎退去の折、見送りの門徒の懇請により蓮如みずから鏡を見て描いたものとされている。また、この御影は、「御形見の御影」（吉崎東別院伝承として『長浜御坊三百年誌』に伝える）、「身替わりの御影」（『吉崎別院のしおり』）、「鏡の

御影」（『等正寺略縁起』）などと呼ばれるごとく、蓮如の生き写しの絵像であると信じられてきた。生身の蓮如上人そのものといってよいだろう。

御影と対面することにより、蓮如の遺徳を偲び、蓮如に対する熱狂的信仰を表明するのである。説教、法座の合い間にお念仏の声高らかに蓮如御影の前にぬかずくお年寄（特に老女）の姿が多い。

礼拝の対象となる蓮如御影は、平素は京都の東本願寺宝蔵に大切に奉安されている。明治期の東本願寺の様子を記した『大谷寺誌』によれば、

一、慧燈大師影像　一幅
讃文　（省略）
裏書ハ教如上人染筆、毎年大師ノ祥月吉崎別院へ奉送ス

とある。[29] 蓮如御影が吉崎別院へ下向されることが明治期にはすでに恒例となり「毎年」と記されるほど定着していたことをあらわしている。

なお、「慧燈大師」というのは蓮如の諡号である。浄土真宗において、祖師親鸞（見真大師、明治九年十一月二十八日下賜）とともに大師号の宣旨をいただいた（明治十五年三月二十三日下賜）。これを記念して、東西両本願寺間で「宣旨奉送迎」という年中行事が続けられている。

「宣旨奉送迎」とは、見真・慧燈両大師の宣旨を東西の本願寺が交替で保管するのであるが、毎年交互に宣旨のやりとりをするものである。宣旨をお送りしたり、お迎えしたりするものだが、宣旨を運ぶ時には、威儀を正してうやうやしく宣旨の入った函を運ぶのである。[30] 本願寺における宗祖と中興の祖に対する祖師信仰が生み出した真宗独自の年中行事といってよいだろう。

さて、蓮如忌に先立つこと一週間、四月十七日の昼東本願寺より蓮如御影が輿に乗せられて、下向の道を歩まれる。輿といってもリヤカー仕立てのこじんまりとしたものであるが、その輿は、約一〇人の僧俗に守られて、一路吉崎へと道中を続ける。

現在の下向コースは、東本願寺を出て、烏丸通りを三条まで上り、京津街道・西近江路を巡っていく。福井県内に入れば、木ノ芽峠を越えて今庄へぬける。北陸街道を北上して吉崎の別院へ入る。

御忌の期間中、蓮如御影は開帳され、万人の礼拝を受けることとなる。東本願寺出発時の「お腰延ばしの儀」と吉崎別院でのみ開帳されている。これは、蓮如御影の神秘性を高める効果があったことだろう。いわば、カリスマ性向上の一因であったことだろう。

五月二日に御忌が終わると、蓮如御影は下向路を戻っていく。今庄までは下向の逆路をたどるが、そこよりコースをかえて栃ノ木峠

を越えて、北国街道・中仙道を通る。大津よりは下向路の道中を進む。そして、東本願寺へと戻ってくる（この間八日間）。

途中、一一〇余ケ所の寺院・道場・門徒の家に立ち寄る。各立寄所においては、盛大に蓮如忌法要が営まれる。その法要は次の順で行われる。

(1)読経（正信偈あるいは嘆仏偈・短念仏・三首和讃・願以廻向）

(2)随行の布教師の説教

(3)参詣者の焼香

なお、泊まりの宿では、法要後も通夜で説教がくりかえし開かれる。

この行事は、普通「レンニョサン」・「蓮如忌」とも呼ばれ、厳粛に門徒の手によって運営されている。吉崎東別院に勤める門徒世話方の手によって、行事の計画・随員の選出などがなされることから行事運営のイニシアチブは門徒側にあるといえる。

道中の随員構成は次のとおりである（昭和四十六年当時）。

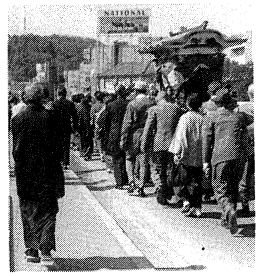
(1) 蓮如御影を巡行するにあたっての責任者である「宰領」一名

(2) 御影を運ぶ「供奉」六名

(3) 本山から特別に派遣される「随行布教師」一名

この八名が一丸となって御影を守り、京都・吉崎間を徒歩で御輿（蓮如御影を入れた御箱がその中に入っている）を引き引き道中するわけである。なお、「供奉」を「お供人」とも呼び、「随行布教師」は正式には「特別教導」と呼ばれている。

御輿は、吉崎・京都間を運ぶ輿と一部区間を運ぶ輿の二種がある。京都から敦賀あたりまではリヤカー仕立てのこじんまりしたものであるが、今庄・武生・福井・細呂木の各所の輿は、目にもあざやかな八柱入母屋造りの素晴らしいものである。吉崎に近づくに従ってだんだん豪華になっていく輿を見るだけでも、今も蓮如を慕う北陸門徒の熱意を読み取ることは容易であろう。



御輿を引く随員の構成については、越前—四名、金沢—一～二名、小松—一～二名というように、現在ではほぼ決まっているという。[31]

江戸中期から後期にかけての行事隆興期・最盛期には、北陸の地から選ばれるばかりでなく、近江・京都・大阪の地からも道中の希望者が出ていたであろうことは、現在も北陸以外の地域よりの参加が続いていることからも想像できるところである。

また、蓮如が吉崎退去後建てた山科御坊へ通ずる諸街道の途中には、大津・京都・大阪・遠くは江戸の巡拝講の講中の手によって、

「蓮如上人御旧跡地　是より五町」

というような道標が現在でも散在している。これらの道標は、単に街道の道しるべとしての機能の他に、蓮如上人廟・山科御坊などへの参拝を案内する機能も考えなくてはならないだろう。ある道標などは、蓮如ゆかりの真宗寺院への巡拝のためにのみ建てられているのである。このような参拝講の存在や道標の特異性などから、広く信仰を集め、全国各地より参詣する人々がいたであろう。

現在でも北陸の門信徒にあっては、一生の

うちで一度は参加して道中させていただきたいと望み、道中が叶わなければ、御輿を引く綱に少しでも触りたいと願う。また、吉崎御坊に参詣して「蓮如さん」を拝みたいと願う善男善女は非常に多い。吉崎までは遠くて参詣できない人々のために近くの寺院に参拝する「近吉崎」という風習も今だに残っている。[32]

こうした情熱は、近世でもあったであろう。また、蓮如の教化を受けた土地柄、蓮如への思慕の念は北陸に強いのではあるが、北陸以外の土地、たとえば山科・大阪の御坊の周辺の門信徒にあっても強く望まれたものと思われる。すなわち、「レンニョサン」はひとり北陸門徒の蓮如信仰の場に止まらず、京都・大阪・近江さらに関東などの真宗門徒の信仰表明の大きなチャンスであったと考えられる。

「レンニョサン」の正式な記録である「道中日記」は、蓮如御影の東本願寺到着とともに東本願寺で預かることになっているため、[33]近世はもちろん明治大正期の様子を知ることができない。以上述べてきたとおり推量の域を出ていない。

「蓮如忌」ならびに「レンニョサン」の行事は、吉崎別院にとって比重の大きい行事といえる。この期間中、全国より寄せられる門信徒の賽銭によって別院経営の大半を充てていることや、「蓮如忌」の期間が親鸞忌の八日間より長く十日間[34]であることからも、当別院にとって最も重要な行事・法会であることがわかる。

この行事の起源はいつであったのだろう。今だに確実なことがいえない。研究者によってまちまちである。少し整理してみよう。

まず、蓮如忌を行う真宗大谷派吉崎別院の伝承によれば、

蓮如上人御影は当山唯一の宝物にして教如上人御讃及御裏書あり、六十一才一二人講中に与へ給へる自画像にして御形見の御影と称す、延宝年由ありて本山に預け翌年より毎年一回必ず京都より吉崎へ御下向相成る御影にして有縁の御尊影なり、毎年四月蓮如忌には一般の拝礼を許さるる、

と伝えられている。[35]延宝年間（一六七三～一六八一）説といえるものである。

延宝の頃といえば、中島文男氏も坪内晋氏も延宝五年（一六七七）説である。金津町の永宮寺[36]の古文書『蓮如上人御旧跡由緒縁起』によって立説されたものである。最近では、石田由美子氏が延宝元年（一六七三）説をいわれている。[37]

次に、坪内氏は宝暦二年（一七五二）の説も紹介され、この説の方を認めている。特別教導（御影道中の特派布教師）を何度もされた中沢南水氏もこの説をとっている。永宮寺に伝わる別の古文書によって考察したようである。森龍吉氏もこれに習っている。

ところが、吉崎別院のお膝元にある願慶寺の古記録を見ると、もう少し時代はさかのぼる。

蓮如上人真影　本願寺釈教如　花押
慶長十六年辛稔二月廿八日
越前国坂北郡細呂宣郷吉崎惣道場
常住物也

此ノ尊像ハソレヨリ約百余年ヲ経テ享保六丑年八月二十八日ニ願慶寺ヨリ本山へ上納シ毎年四月東別院へ御下向ノ恒例トナレル有名ナル吉崎御忌ノ尊影是ナリ、

という享保六年（一七二一）説である。[38]この説は、橋本鉄男氏、伊藤睹覧氏がそれぞれの

著書で述べているところである。

さらに、『吉崎のむかし話』には、承応二年（一六五三）説が唱えられている。なお、諸説の詳細については詳説する余裕がないので、それぞれの著書を参考にしてほしい。

いずれにしても、真宗大谷派本願寺の古文書類を確かめられない今、いずれの年より始まったかという問題はたなあげとして、現在までに提出されている諸説を掲げるに止める。

さて、最後に行事における蓮如信仰の意識を見てみよう。

「レンニョサン」において、蓮如御影は各地を巡るが、東本願寺と吉崎別院の二ケ所でしか開帳せず、蓮如御影ひいては〝蓮如という個人〟の神秘性を高める効果があったであろう。また、御箱（御影を収めた櫃）には東本願寺の紋章付の朱色の布が覆われ、本山・別院の関係係員以外は布を取り払って御箱そのものに触れることを禁ぜられている。これもまた、蓮如の神秘性＝カリスマ性を高揚させる効果があったであろう。

このような蓮如に対するカリスマ信仰が今だに見られることは驚きに値する。

さらに、一部の門信徒には「特別教導」に対して、蓮如さまの身がわりであり、さらに蓮如さまそのものであると意識している[39]節がある。

また、蓮如御影を運ぶことは蓮如に対する真宗独自の報恩謝徳の精神の発露として考えられるが、民俗学的に考察すれば少し違った結論が導かれる。そうした真宗的精神の意識下には、死した蓮如が神として今なお生き続けており、現在でも村々を巡ってこられるのだという意識（巡り神信仰）を一常民として持ち続けているということである。

巡り神信仰とはいわゆる「遊幸信仰」である。この遊幸信仰について五来重氏は次のように述べている。

（上略）庶民の保持する原始的神観念はいわゆる遊幸神・めぐり神で、その憑依する巫的宗教者（聖）に負われて人々のあいだをつねに移動するものであった。この神観念は庶民信仰に関するかぎり諸仏像・諸経典・僧侶にも妥当するもので、廻り地蔵や回村大般若・巡り大師などの信仰を見れば思いなかばにすぎるものがあろう。

（中略）善光寺に数多くの新仏やお前立が鋳られ、長谷寺十一面観音像が画かれてさかんに出開帳したことも、空海・親鸞・蓮如の肖像や名号が各地をめぐる行事があるのもおなじ庶民化の現象として証明することができる。

と述べている[40]が、極めて示唆的である。

カリスマ信仰や遊幸信仰と結びついた真宗独自の信仰表明が「レンニョサン」という行事にあらわれて、門信徒の蓮如信仰として発露してゆくのだろう。それは、真宗の場合では信仰生活のさらなる発展すなわち真宗信仰の深化に大きく影響を与えたものと考えられよう。

注

（1）この項、森龍吉著『蓮如』、百瀬明治著『大実業家・蓮如』、菊村紀彦編『親鸞辞典』蓮如の項などを参考にした。

（2）『日本思想大系』37　祖徠学派一二四頁。

（3）たとえば、森龍吉氏・佐々木孝正氏などの諸論究は見るべきものが多いと思われる。

(4)　『真宗史料集成』第二巻「蓮如とその教団」解説　九頁
(5)　「本福寺由来記」『真宗史料集成』第二巻　六六一頁
(6)　伊藤睹覧著「蓮如忌と山遊び」『仏教民俗学大系』六　仏教年中行事　二〇一頁
　なお、筆者は未調査であるが、越前において、三国町智敬寺・西光寺・川尻性光坊などにおいて蓮如忌があると同書は報告している。
(7)　『真宗史料集成』第二巻「蓮如忌とその教団」解説　三三頁
(8)　『真宗新辞典』　五二〇頁
(9)　「第八祖御物語空善聞書」に、
　オレホド名号カキタル人ハ日本ニアルマシキソ、ト仰候キ
と、蓮如自身が讃えている。
　『真宗史料集成』第二巻「蓮如とその教団」四二三頁
(10)　この項、森龍吉著『蓮如』・千葉乗隆著「越前と真宗」―『福井県の地名』付録「歴史地名通信」9―などを参考にした。
(11)　文明五年二月八日御文（章）
　『真宗史料集成』第二巻　一五五頁
(12)　文明五年八月二日御文（章）
　同右書　一五八頁
(13)　文明五年八月十二日御文（章）
　同右書　一五九頁
(14)　文明六年正月二日御文（章）
　同右書　一八五頁
(15)　同日御文（章）　(14)と同じ
(16)　同日御文（章）　(14)と同じ
(17)　同日御文（章）　(14)と同じ
(18)　故佐々木孝正著「本願寺の葬制」（『大谷学報』四九・三　七二頁）
　後に『仏教民俗史の研究』に所収。
(19)　「第八祖御物語空善聞書」
　『真宗史料集成』第二巻　四三三頁
(20)　この項、故佐々木孝正氏の『仏教民俗史の研究』を参考にした。
(21)　『宗教学辞典』小口偉一・堀一郎監修　六二〇～六二二頁
(22)　たとえば、大桑斉氏の「中世末期における蓮如像の形成―願徳寺実悟の場合―」（『大谷大学研究年報』第二十八集所収）などがある。
(23)　「第八祖御物語空善物語」
　『真宗史料集成』第二巻　四三七頁
(24)　「キョウニョサン」については、『巡りのフォークロアー遊行仏の研究』において松崎憲三氏が報告している（同書一七九～一九四頁）。
　「ジョウニョサン」については、「能登の御影巡回―歓喜光院御崇敬とその背景―」（『加能民俗研究』十六所収）において西山郷史氏が報告している（同書一九～二九頁）。
　また、近江地方には「キョウニョサン」・「タツニョザン」がそれぞれ巡回していることを『日本の民俗』25滋賀―において、橋本鉄男氏は報告している（同書一六五～一六七頁）。
　以上、目についたものをいくつかあげたが、それ以外でも行事は実施されているのかも知れない。先輩諸氏のご教示をお願いしたい。
(25)　県内のものに限れば、中島文男著

「蓮如忌と道中の習俗」（『えちぜんわかさ』第二号所収）や坪内晋著『蓮如上人御影供奉記』・「蓮師の道」（『真宗研究』26所収）などがある。

(26) (25)の他に次のようなものがある。筆者の看見の範囲である。
中沢南水著『長浜御坊三百年誌』
網田義雄著『越前真宗誌』
橋本鉄男著『日本の民俗』25「マワリボトケ」の項。なお、氏には「レンニョッサン覚書」がある。
松崎憲二著『巡りのフォークロアー遊行　仏の研究―』
伊藤睹覧著「蓮如忌と山遊び」（『仏教民俗学大系』6）
以上の著書・報告を中心に参考にさせていただいた。謝意を表したい。

(27) 『吉崎写真集並寺誌』（願慶寺蔵版、昭和八年）には、
「吉崎蓮如忌ヲ吉崎祭ト呼ビ最モ賑栄ヲ極メシ寛文年中ヨリ貞享元禄時代ニカケ」とある（同書九頁）。なお、中島文男氏も別の古文書で「吉崎祭」を紹介している。

(28) この項、中島文男氏の「蓮如忌と道中の習俗」（『えちぜんわかさ』第二号所収）を参考にした。

(29) 鈴木信雄著『大谷寺誌』仏像の部　明治三十四年刊。

(30) 川島真量著『大谷派本願寺伝統行事』昭和五十二年刊。五二～五四頁。なお、『真宗新辞典』にも「各派年中行事一覧」として、四月一日に「宣旨奉送迎（の）儀」が掲っている。

(31) 金津町の永宮寺住職（当時）太堂宗栄氏のご教示による。ちなみに、昭和四十六年当時の国別参加者の構成は、越前―八名・加賀―八名・近江―二名・京都大阪―各一名であった。

(32) 高道正信氏はその著『蓮如』において大聖寺にあるというが、福井市の川西地区でも「近吉崎」の張り紙が見られる。

四月二十三日	ひる一時より
五月　二日	正午まで

御真影御開帳　説教・御絵解き
近吉崎こと　坂井郡三国町台
智敬寺
（・点筆者加之）

(33) 当時の吉崎東別院副輪番であった菅野鉄念氏のご教示による。
現在、随行の人々は別院より配布の「道中日記」を持って巡るが、それと性格は異なり本山へ納める正式な報告書であろう。

(34) 中沢南水氏・坪内晋氏によれば、最初は三昼夜で執行され、次第に長くなり十日間にまで延長され勤行が勤められているという。

(35) 吉崎東別院発行の『参拝のしおり』に書かれており、一応の目安となる。

(36) 永宮寺は、中島氏・坪内氏の紹介した通り、坂井郡川北の一二人講の講坊主であった寺院であり、蓮如御影を一時預かっていた由緒のため、ここで上がった賽銭は「レンニョサン」の随行員が集められない事になっている

（太子堂宗氏のご教示による）。その事は元の持ち主への配慮と考えてよいだろう。

(37)　「旅と伝承―蓮如上人御下向見聞記」（『真宗』昭和六十三年六月号所載）において、「今年は三百十五回目という。」として石田氏は述べている。

なお、氏は三河絵解き研究会の会員であり、東本願寺が特別編成した蓮如上人絵伝調査研究班の一員でもある。

(38)　(27) 参照のこと

(39)　中沢南水氏のご教示による。

なお、特別教導の役目は、各地で説教することにより、門信徒の教義の理解を深めさせる。また、真宗再興の祖蓮如のご遺徳をしのばせると同時に真宗本来の信仰意識を高める。以上二点がその役割ではなかろうか。本来、随行する教導は付かず、後世、本山の方で付けたという事であるが、いつからであるかは不詳である。

(40)　五来重編著『元興寺極楽坊　中世庶民信仰資料の研究』地上発見物篇